『心理学紀要』（明治学院大学）第 29 号　2019 年　19–30 頁

【原著】

送り手の集団成員性が受け手の感情共有に及ぼす影響[1)]

田　中　知　恵（明治学院大学心理学部）

要　約

受け手が送り手の感情を共有する状況について検討した。実験参加者に，送り手から第三者（ターゲット人物）のエピソードを伝えられる場面を想像させた。その際，送り手の集団成員性（内集団・外集団）と同一のエピソードに対する送り手の感情表出（憧れる・おもしろい）を操作した。送り手の感情推測，受け手である実験参加者の感情，送り手に対する態度，ターゲット人物に対する送り手の態度推測，ターゲット人物に対する実験参加者の態度を測定した。その結果，“おもしろい”という感情に対して，送り手が内集団成員である場合は外集団成員である場合よりも，受け手はその感情を共有した。ターゲット人物に対する送り手の態度推測と，ターゲット人物に対する受け手の態度に関連が認められた。またターゲット人物に対する受け手の態度と，送り手に対する受け手の態度にも関連が認められた。コミュニケーション過程における感情共有の働きについて考察された。

キーワード：感情共有，集団成員性，態度

問　題

本研究の目的

これまでの社会心理学研究では，記憶や思考過程に感情が及ぼす影響や，感情制御過程に関わる研究知見が多く示されてきた（e.g., Forgas, 2006, Gross, 2014）。研究により，感情と認知の関係が明らかにされたが，いずれも個人内過程において感情の影響を検討したものであった。他方，個人間過程における感情の役割について実証的に検討した研究は多くないものの，人が感情を伴う情報を他者と共有すること（Christophe & Rimé, 1997, Rimé, 2007）や，送り手の感情を共有した受け手が，送り手との結びつき（coalition）を感じること（Peters & Kashima, 2007）などがこれまで明らかにされている。

これらの研究により，人がコミュニケーションを通じて感情を他者と共有する場合があることが示された。しかしながら，受け手の感情共有の動機が高まるのはどのような状況かという点に関しては検討が十分ではない。受け手は表出された送り手の感情を常に共有するわけではない。本研究では感情共有を，コミュニケーションの送り手と受け手がコミュニケーション内容に対して同じ感情状態を共有することと定義し，コミュニケーションの受け手において感情共有が生じる状況について検討する。

感情共有について検討した研究

感情共有が生じる状況について実証的に検討した研究として，Peters & Kashima（2007）が挙げられる。シナリオを用いた実験では，実験参加者にコミュニケーションの受け手の立場として，知り合いである送り手から第三者（ターゲット人物）のエピソードを告げられる場面を想像させた。その際，ひとつのエピソードに対して送り手が表出する感情を操作した。感情はエピソードに適合する感情，もしくは適合しない感情であった。た

とえば“家に帰るお金がなかったターゲット人物は，盲目の大道芸人にお金をあげるふりをしながら，そのギターボックスから 20 ドルを盗んだ”というエピソードに対して，半数の参加者には送り手が“怒り”感情を示しながら伝えてきた場面を想像させた（適合条件）。残り半数の参加者には送り手が“怖れ”感情を示しながら伝えてきた場面を想像させた（非適合条件）。参加者の感情状態についてたずねたところ，適合条件の参加者の方が非適合条件の参加者よりも，送り手によって表出された感情を強く回答した。また，適合条件の参加者の方が非適合条件の参加者よりも，送り手に対してより結びつきを感じ，ターゲット人物に対して送り手の態度に協調した態度を回答した（Peters & Kashima, 2007, Study 2）[2]。研究では，ターゲット人物のアイデンティティを操作するために，ターゲット人物として半数の参加者には個人名を告げたが，残り半数の参加者には他大学の学生のひとりであると告げていた。ただしこの要因は従属変数に影響を与えていなかった。

上記の研究で認められた効果は，受け手が送り手の感情を共有することによって生じると考えられる。すなわち，送り手の感情がコミュニケーション内容に適合しているほど，その感情は共有されやすく，送り手に対する結びつきの程度が高く感じられるだろう。そしてさらに送り手の態度と同じ態度がターゲット人物に対して形成されるだろう。

送り手の集団成員性が受け手の感情共有に及ぼす影響

上記の研究で示されたように，感情共有が社会的関係性の構築に影響を及ぼすのであれば，送り手との関係性構築が重要である場合はそうでない場合よりも，受け手は送り手の感情を共有しようとする可能性がある。たとえば，受け手にとってコミュニケーションの送り手が重要他者である場合，受け手は相手の感情をより共有すると考えられる。また送り手が内集団成員である場合も同様に，受け手は送り手が外集団成員である場合よりも，その感情を共有すると考えられる。これまでの社会心理学研究において示されてきたように，人は基本的な動機として集団への所属欲求を持つ（Baumeister & Leary, 1995）。そのため，集団成員の社会的アイデンティティは，個人内過程や他者との相互作用過程に大きな影響を与えうる。たとえば，内集団への同一視の程度は，集団における出来事と集団成員の心理的幸福感を媒介する（Bizumic et al., 2009）。また人は内集団成員との類似性を，外集団成員との類似性よりも高く知覚する。そして内集団成員をより肯定的にとらえて，集団成員に対して協調する（Robbins & Krueger, 2005）。これらのことから，コミュニケーションの受け手として，人は内集団成員が表出した感情を外集団成員が表出した感情よりも共有しようとする可能性が考えられる。

本研究における変更点と予測

上記で論じた点に関して検討するために，本研究では Peters & Kashima（2007）の研究から以下を変更する。

第一の変更点は，コミュニケーションの送り手の集団成員性である。Peters & Kashima（2007）では，エピソードに適合する感情もしくは非適合な感情が表出されるいずれの条件においても，コミュニケーションの送り手は，受け手（実験参加者）の知り合いである同じ大学の学生として呈示されていた。本研究では，送り手の集団成員性を操作し，送り手が内集団成員である場合だけでなく外集団成員である条件を設ける。そして，送り手が内集団成員である場合に，外集団成員である場合よりも，受け手は送り手の感情を共有することを検討する。

第二の変更点は，実験参加者が受け手として送り手から伝えられる第三者のエピソードの内容である。Peters & Kashima（2007）の研究では，エピソードに適合する感情が送り手によって表出される場合の方が，非適合な感情が表出される場合よりもその感情が共有されたことから，本研究においては適合する感情が表出される場合のみを扱うこととする。ただし，送り手の集団成員性の効果が，送り手によって表出される感情特有のも

のではないことを確認するために，同じエピソードに対して送り手が表出する感情を操作する。具体的には，ある人物が“テーマパークでプロポーズされた”というエピソードに対して，送り手が受け手に“憧れる”と伝える条件と“おもしろい”と伝える条件を設ける。そして，伝えられた感情に関わらず，送り手が内集団成員である場合の方が，外集団成員である場合よりも，受け手が送り手の感情を共有することを検討する。

第三の変更点は，ターゲット人物に関する情報である。Peters & Kashima（2007）では，送り手の感情を共有した受け手は送り手に対する結びつきを感じていた。そして送り手がターゲット人物に対して持つ態度と同様の態度をターゲット人物に対して示した。その研究では，ターゲット人物のアイデンティティを操作するため，ターゲット人物の個人名を示す場合と集団名（他大学の学生）を示す場合を設けていた。こうした操作では，ターゲット人物のアイデンティティ（個人・集団）以外にも，その集団成員性（内集団・外集団），さらにエピソードの鮮明さも操作されてしまう可能性がある。よって本研究では，コミュニケーションの送り手の集団成員性に関わらず，ターゲット人物を送り手の友人である“D さん”と記述することとする。送り手が内集団成員である場合に，外集団成員である場合よりも，受け手は送り手の態度と同様の態度をターゲット人物に対して示すだろう。

第四の変更点は，ターゲット人物に対して送り手が取る具体的な行動を示し，受け手である参加者にその行動を取るか確認する点である。ターゲット人物に対して送り手と同じ態度が受け手に形成されると，受け手は送り手がターゲット人物に対して示す行動と同様の行動を示すと考えられる。本研究ではこの点について検討するため，送り手がターゲットに対して取る行動について参加者に示し，同様の行動を取るかどうかたずねる。

上記の変更点を踏まえ，本研究の予測をまとめると以下のようになる。コミュニケーションの受け手は，送り手が内集団成員である場合に，外集団成員である場合よりも，ターゲット人物に対する送り手の感情を共有するだろう。また送り手の態度と同様の態度をターゲット人物に対して持ち，同じ行動傾向を示すだろう。

方　法

予備調査

実験で用いるエピソードを選出するため，予備調査を実施した。実験参加者と同じ大学の学生 5 名に協力を依頼し，複数の感情を感じると思われるエピソードを収集した。収集したエピソードの中から，本実験の刺激として妥当と思われるエピソードを相談しながら選出した。エピソードは“送り手の友人（ターゲット人物）が恋人にひざまずいてプロポーズされた”という内容のものであった。このエピソードに適合する感情として，“憧れる”“おもしろい”という感情を用いることにし，シナリオを作成した。

実験デザイン

送り手の集団成員性（内集団・外集団）×感情（憧れる・おもしろい）の参加者間要因であった。

実験参加者

都内私立大学の学生 107 名（男性 30 名　女性 77 名）を研究の対象とした。平均年齢は 20.78 歳（SD＝0.97）であった。各条件の人数は 25 名～28 名であった。

送り手の集団成員性の操作

実験のシナリオ中に送り手の集団成員性を示した。内集団条件では,送り手を“大学で知り合った友人（女性）”と説明し，その相手と話しているときに，相手が実験参加者にエピソードを話したことを想像させた。外集団条件では送り手を“電車で隣に座っている人たち（女性）”と説明し，実験参加者が電車に乗っていると，その人たちの会話が聞こえてきたことを想像させた。

送り手の表出する感情の操作

“憧れる”条件では，送り手が第三者（送り手

の友人）のエピソードを話した後に“憧れるよね!?”と続けたことを示した。“おもしろい”条件では，送り手が“おもしろくない!?”と続けたことを示した。

手続き

参加者には“コミュニケーションに関する調査”と説明し，研究への参加を依頼した。その際，内容が参加者に負担を与えるものではないことや，途中でやめたくなった場合にはいつでもやめられることを告げた。全員が同意したため，質問紙を配布し回答を求めた。

参加者には，シナリオの場面（友人と話している or 電車に乗っている）を呈示し，その際の状況（友人があなたに話した or 隣に座っている人たちの会話が聞こえてきた）を想像するよう教示した（場面と状況のいずれも前者が内集団条件，後者が外集団条件）。そして“私の友人の D さんが，恋人にディズニーランドでひざまずいてプロポーズされたんだって。”というエピソードと，送り手の感情（憧れるよね!? or おもしろくない!?）を呈示し，参加者に従属変数への回答を求めた[3)]。

従属変数

質問項目において，送り手のことを内集団条件では“話し手（友人）”，外集団条件では“話し手（電車で隣り合わせた人）”と記述した。

参加者は“話し手は今，以下の感情をどのくらい感じていると思いますか”と質問され，送り手の感情推測を 8 項目（あこがれ，おもしろさ，怒り，称賛，恐怖，気の毒，良い気分，悪い気分）に対して回答した。次に“あなたは話し手の話を聞いて，以下の感情をどのくらい感じていますか”と質問され，受け手である自分の感情を上記と同じ 8 項目に対して回答した。続けて“話し手に対するあなたのお考えをお答えください”と質問され，送り手に対する態度に回答した。具体的には，送り手の信頼性の知覚（“話し手は信頼できる”），送り手との結びつきの知覚（“話し手に結びつきを感じる”），送り手とのコミュニケーション継続の意図（“話し手ともっと話をしたい”），送り手との行動協調の意図（“話し手と出かけたい”），送り手に対するコミュニケーションの意図（“話し手に自分の話もしたい”），送り手の感情理解（“話し手の感情が理解できる”），送り手の感情に対する正しさの知覚（“話し手の感情が正しいと思う”），送り手の感情共有（“話し手と同じように感じる”）の 8 項目であった。その後，参加者は“話し手は，D さんに対してどのように思っているでしょうか”と質問され，ターゲット人物に対する送り手の態度推測 2 項目に回答した（“話し手は D さんが好ましいと思っている”，“話し手は D さんが好ましくないと思っている（逆転）”）。続けて“あなたは D さんに対してどのように思いますか”と質問され，ターゲット人物に対する自分の態度 2 項目に回答した（“あなたは D さんが好ましいと思う”，“あなたは D さんが好ましくないと思う（逆転）”）。

最後に“話し手と D さんが以下の行動を取っていることを想像してください”と教示され，2 項目の質問に対し，話し手と同じ行動を取るか回答した（肯定的行動として“話し手が D さんと話をしている。あなたも話に加わるか”，否定的行動として“話し手は D さんにノートを貸してほしいと頼まれたが，断った。あなたも頼まれたら断るか”）。

参加者には，いずれの従属変数に対しても 7 件法で回答を求めた（1：全くそう思わない－7：非常にそう思う）。

質問紙への回答を終えた参加者に，わからなかった点や疑問に感じた点がなかったかたずねた。そうした点がないことを確認し，実験を終了した。

結　果

送り手の感情推測

シナリオ中で送り手が表出していたのは“憧れる”もしくは“おもしろい”の感情であった。

“あこがれ”感情に対する 2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果のみ有意であった（$F(1, 103)=62.35$, $p<.001$）。

“憧れる”条件（M=6.12, SD=1.44）は“おもしろい”条件（M=4.53, SD=1.64）よりも得点が高かった。

“おもしろさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果（$F(1, 103)=28.89$, $p<.001$）ならびに集団成員性×感情の交互作用効果（$F(1, 103)=4.92$, $p<.05$）が認められた。内集団条件において“おもしろい”群（M=5.48, SD=1.21）は“憧れる”群（M=3.00, SD=1.69）よりも得点が高かった（$F(1, 103)=34.21$, $p<.001$）。外集団条件において“おもしろい”群（M=4.72, SD=1.84）は“憧れる”群（M=3.69, SD=1.85）よりも得点が高かった（$F(1, 103)=4.34$, $p<.05$）。“憧れる”条件では，内集団群（M=3.00, SD=1.69）と外集団群（M=3.69, SD=1.85）に差は見られなかったが（$F(1, 103)=2.61$, ns），“おもしろい”条件において内集団群（M=5.48, SD=1.21）は外集団群（M=4.72, SD=1.84）よりも得点が高い傾向が認められた（$F(1, 103)=2.82$, $p<.10$）。送り手の“おもしろさ”感情得点の平均値を図1に示す。

送り手の感情推測について，他にたずねた項目に対しても同様の2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行った。その結果，“称賛”感情に対して，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=11.77$, $p<.001$），“憧れる”条件（M=5.15, SD=1.51）は“おもしろい”条件（M=3.98, SD=1.89）よりも得点が高かった。“気の毒”感情に対しても，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=13.85$, $p<.001$），“憧れる”条件（M=1.25, SD=0.57）は“おもしろい”条件（M=1.96, SD=1.35）よりも得点が低かった。“良い気分”感情に対しても，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=7.27$, $p<.01$），“憧れる”条件（M=4.98, SD=1.65）は“おもしろい”条件（M=4.07, SD=1.67）よりも得点が高かった。“悪い気分”感情に対しても，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=9.23$, $p<.01$），“憧れる”条件（M=2.03, SD=1.46）は“おもしろい”条件（M=2.98, SD=1.66）よりも得点が低かった。その他の感情に対しては，条件間に差は見られなかった。

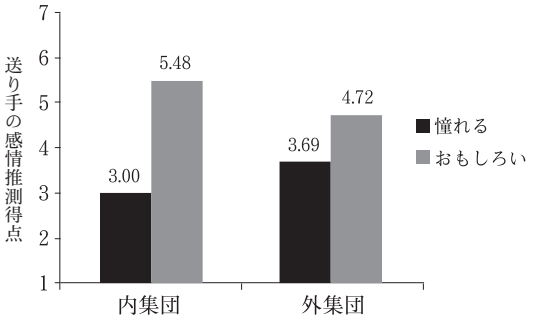

図1　送り手の“おもしろさ”感情の推測得点

受け手である参加者の感情

受け手である参加者に自分の感情についてたずねた項目得点のうち，“あこがれ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（$Fs(1, 103)<2.37$, ns）。

“おもしろさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果（$F(1, 103)=3.42$, $p<.10$）ならびに集団成員性×感情の交互作用効果（$F(1, 103)=2.86$, $p<.10$）に有意な傾向が認められた。内集団条件において“おもしろい”群（M=4.17, SD=1.51）は“憧れる”群（M=2.97, SD=1.60）よりも得点が高かった（$F(1, 103)=7.38$, $p<.01$）。外集団条件において“憧れる”群（M=3.72, SD=1.94）と“おもしろい”群（M=3.77, SD=1.83）には差が見られなかった（$F(1, 103)<1$, ns）。“憧れる”条件において，内集団群（M=2.97, SD=1.60）は外集団群（M=3.72, SD=1.94）よりも得点が低い傾向が認められた（$F(1, 103)=2.90$, $p<.10$）。“おもしろい”条件においては内集団群（M=4.17, SD=1.51）と外集団群（M=3.77, SD=1.83）には差が見られなかった（$F(1, 103)<1$, ns）。受け手である参加者の“おもしろさ”感情得点の平均値を図2に示す。

受け手である参加者自身の感情について，他にたずねた項目に対しても同様の2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行った。その結果，“気の毒”感情に対して，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=6.58$, $p<.05$），“憧れる”条件

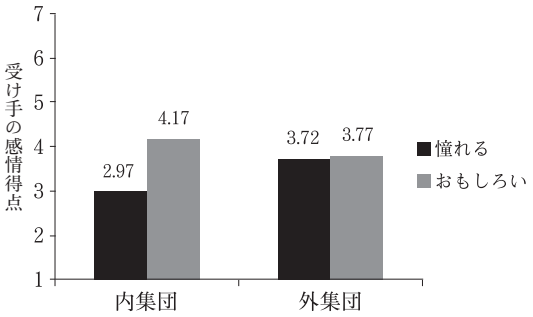

図 2　受け手の“おもしろさ”感情得点

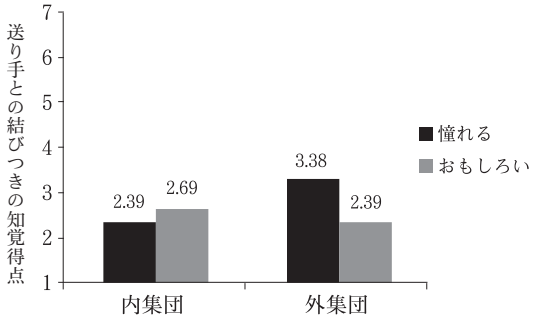

図 3　送り手との結びつきの知覚得点

（*M*=1.75, *SD*=1.37）は“おもしろい”条件（*M*=2.55, *SD*=1.78）よりも得点が低かった。“悪い気分”感情に対しても，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=5.56$, $p<.05$），“憧れる”条件（*M*=1.81, *SD*=1.47）は“おもしろい”条件（*M*=2.53, *SD*=1.43）よりも得点が低かった。その他の感情に対しては，条件間に差は見られなかった。

送り手の信頼性の知覚

送り手の信頼性の知覚についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 103)=5.31$, $p<.05$），“おもしろい”条件（*M*=3.06, *SD*=1.54）は“憧れる”条件（*M*=3.75, *SD*=1.59）よりも得点が低かった。

送り手との結びつきの知覚

送り手との結びつきの知覚についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，集団成員性×感情の交互作用効果（$F(1, 103)=4.42$, $p<.05$）のみ有意に認められた。内集団条件において“おもしろい”群（*M*=2.69, *SD*=1.39）と“憧れる”群（*M*=2.39, *SD*=1.75）には差が見られなかった（$F(1, 103)<1$, *ns*）。外集団条件において“おもしろい”群（*M*=2.39, *SD*=1.50）は“憧れる”群（*M*=3.38, *SD*=1.52）よりも得点が低かった（$F(1, 103)=4.76$, $p<.05$）。“憧れる”条件では，内集団群（*M*=2.39, *SD*=1.75）は外集団群（*M*=3.38, *SD*=1.42）よりも得点が低かったが（$F(1, 103)=6.11$, $p<.05$），“おもしろい”条件において内集団群（*M*=2.69, *SD*=1.39）と外集団群（*M*=2.39, *SD*=1.75）には差がみられなかった（$F(1, 103)<1$, *ns*）。送り手との結びつきの知覚得点の平均値を図 3 に示す。

送り手とのコミュニケーション継続の意図

送り手とのコミュニケーション継続の意図についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs$(1, 103)<2.64$, *ns*）。

送り手との行動協調の意図

送り手との行動協調の意図についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs$(1, 103)<2.64$, *ns*）。

送り手に対するコミュニケーションの意図

送り手に対するコミュニケーションの意図についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，集団成員性の主効果のみ有意な傾向が認められた（$F(1, 103)=3.28$, $p<.10$）。内集団条件（*M*=2.23, *SD*=1.60）は外集団条件（*M*=2.83, *SD*=1.62）よりも得点が低い傾向が見られた。

送り手の感情理解

送り手の感情理解についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった

(Fs(1, 103)<2.30, ns)。

送り手の感情に対する正しさの知覚

送り手の感情に対する正しさの知覚についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果（F(1, 103)=4.54, p<.05）ならびに集団成員性×感情の交互作用効果が有意に認められた（F(1, 103)=4.78, p<.05)。内集団条件において“おもしろい”群（M=3.28, SD=1.19）と“憧れる”群（M=3.26, SD=1.75）には差が見られなかった（F(1, 103)<1, ns)。外集団条件において“憧れる”群（M=4.38, SD=1.76）は“おもしろい”群（M=3.30, SD=1.72）よりも得点が高かった（F(1, 103)=8.11, p<.01)。“憧れる”条件では，外集団群（M=4.38, SD=1.75）は内集団群（M=3.26, SD=1.19）よりも得点が高かったが（F(1, 103)=7.23, p<.01)，“おもしろい”条件において内集団群（M=3.28, SD=1.19）と外集団群（M=3.00, SD=1.72）には差がみられなかった（F(1, 103)<1, ns)。感情に対する正しさ知覚得点の平均値を図 4 に示す。

送り手の感情共有

送り手の感情共有についてたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs(1, 103)<1.90, ns)。

ターゲット人物に対する送り手の態度推測

ターゲット人物に対する送り手の態度推測についてたずねた 2 項目の得点には有意な相関が認められたため（r=.68, p<.001)，合計して態度推測得点を作成した（得点の範囲：2〜14)。この得点に対する 2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果のみ有意に認められ（F(1, 103)=34.94, p<.001)，“憧れる”条件（M=11.17, SD=2.47）は“おもしろい”条件（M=7.98, SD=3.05）よりも得点が高かった。

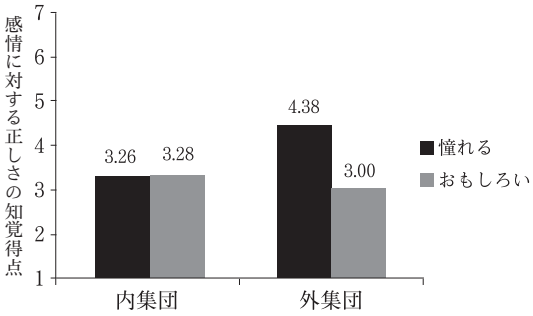

図 4　感情に対する正しさの知覚得点

ターゲット人物に対する受け手の態度

ターゲット人物に対し，受け手である参加者の態度をたずねた 2 項目の得点には有意な相関が認められたため（r=.43, p<.001)，合計して態度推測得点を作成した（得点の範囲：2〜14)。この得点に対する 2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs(1, 103)<1.82, ns)。

送り手がターゲットに対して取る行動への協調

送り手がターゲットに対して取る肯定的行動への協調に関してたずねた項目得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs(1, 103)<1, ns)。否定的行動への協調に関してたずねた項目得点に対しても同様の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（Fs(1, 103)<1.47, ns)。

送り手の感情推測と受け手の感情の関連

参加者が送り手の“あこがれ”感情を推測した得点と，受け手の“あこがれ”感情得点には，有意な相関が認められた（r=.30, p<.01)。この変数間の関連を群ごとに検討したところ，内集団・“憧れる”群では相関が認められなかったが（r=.06, ns)，内集団・“おもしろい”群では有意な相関が認められた（r=.47, p<.01)。外集団・“憧れる”群では相関のある傾向が認められ（r=.32, p<.10)，また外集団・“おもしろい”群でも有意な相関が認められた（r=.57, p<.05)。

参加者が送り手の“おもしろさ”感情を推測した得点と，受け手の“おもしろさ”感情得点には，

有意な相関が認められた（r=.61, p<.001）。この変数間の関連を群ごとに検討したところ，内集団・“憧れる”群では有意な相関が認められたが（r=.61, p<.001），内集団・“おもしろい”群では相関が認められなかった（r=.09, ns）。外集団・“憧れる”群では有意な相関が認められ（r=.73, p<.001），また外集団・“おもしろい”群でも有意な相関が認められた（r=.75, p<.001）。

送り手の態度推測と受け手の態度の関連

ターゲット人物に対する態度をたずねた 2 項目（r=.43, p<.001）の合計得点と，ターゲット人物に対する送り手の態度推測をたずねた 2 項目（r=.68, p<.001）の合計得点には有意な相関が認められた（r=.38, p<.001）。また，ターゲット人物に対する態度得点と，送り手に対する態度をたずねた 8 項目（α=.92）の合計得点にも有意な相関が認められた（r=.40, p<.001）。

送り手との感情の一致度が送り手に対する態度に及ぼす影響

送り手の感情に対する推測と，受け手自身の感情との一致度が，送り手に対する態度に及ぼす影響について検討した。

“憧れる”条件において，送り手の“あこがれ”感情推測得点と受け手の“あこがれ”感情得点との差分を算出した。差分の度数分布を確認し，絶対値が 2 以下であった 30 名を一致度高群，3 以上であった 25 名を一致度低群とした。そして送り手に対する態度をたずねた 8 項目の得点それぞれに対する群間の差を検討するため t 検定を行った。

その結果，どの項目においても，有意に一致度高群の方が一致度低群よりも得点が高かった（ts(53)>2.04, ps<.05）。各項目に対する一致度高群と一致度低群の得点を表 1 に示す。

同様に，“おもしろい”条件において送り手の“おもしろさ”感情推測得点と受け手の“おもしろさ”感情得点との差分を算出した。差分の度数分布を確認し，絶対値が 1 以下であった 28 名を一致度高群，2 以上であった 24 名を一致度低群とした。そして送り手に対する態度をたずねた 8 項目の得点それぞれに対する群間の差を検討するため t 検定を行った。

その結果，5 項目において，有意に一致度高群の方が一致度低群よりも得点が高かった（ts(50)>2.26, ps<.05）。また残りの 3 項目においても，一致度高群の方が一致度低群よりも得点が高い傾向が認められた（ts(50)>1.72, ps<.10）。各項目に対する一致度高群と一致度低群の得点を表 2 に示す[4)]。

送り手との感情の一致度がターゲット人物に対する送り手の態度の推測に及ぼす影響

送り手の感情に対する推測と，受け手自身の感情との一致度が，送り手のターゲット人物に対する態度の推測に及ぼす影響について検討した。

“憧れる”条件において，ターゲット人物に対する送り手の態度推測得点に対する一致度高群（M=10.91, SD=2.74）と一致度低群（M=11.46, SD=2.13）の t 検定を行ったが，差は見られなかった（t(53)<1, ns）。

同様に，“おもしろい”条件において，ターゲット人物に対する送り手の態度推測得点に対する一致度高群（M=8.65, SD=3.06）と一致度低群（M=6.53, SD=2.56）の t 検定を行ったところ，一致度高群は一致度低群よりも得点が高かった（t(50)=2.26, p<.05）。

送り手との感情の一致度がターゲット人物に対する受け手の態度に及ぼす影響

送り手の感情に対する推測と，受け手自身の感情との一致度が，受け手のターゲット人物に対する態度に及ぼす影響について検討した。

“憧れる”条件において，ターゲット人物に対する受け手の態度得点に対する一致度高群（M=9.72, SD=2.77）と一致度低群（M=9.54, SD=2.71）の t 検定を行ったが，差は見られなかった（t(53)<1, ns）。

同様に，“おもしろい”条件において，ターゲット人物に対する受け手の態度得点に対する一致度高群（M=9.38, SD=2.25）と一致度低群（M=9.27,

表 1　送り手に対する態度得点（“憧れる”条件）

送り手に対する態度	一致度高（n＝30）	一致度低（n＝25）	t
送り手の信頼性の知覚	4.19（1.60）	3.25（1.46）	2.37*
送り手との結びつきの知覚	3.60（1.76）	2.04（1.20）	3.95**
送り手とのコミュニケーション継続意図	3.60（1.66）	2.50（1.32）	2.79**
送り手との行動協調の意図	3.00（1.88）	2.14（1.27）	2.04*
送り手に対するコミュニケーションの意図	3.28（1.90）	2.07（1.22）	2.89**
送り手の感情理解	4.63（1.76）	3.43（1.87）	2.55*
送り手の感情に対する正しさの知覚	4.41（1.78）	3.11（1.66）	2.91**
送り手の感情共有	4.03（1.87）	2.14（1.11）	4.66**

注）括弧内は標準偏差
$^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$

表 2　送り手に対する態度得点（“おもしろい”条件）

送り手に対する態度	一致度高（n＝28）	一致度低（n＝24）	t
送り手の信頼性の知覚	3.34（1.52）	2.47（1.46）	1.87†
送り手との結びつきの知覚	2.91（1.53）	1.87（0.83）	2.45*
送り手とのコミュニケーション継続意図	3.28（1.80）	2.13（1.13）	2.26*
送り手との行動協調の意図	2.78（1.70）	1.60（0.91）	2.52*
送り手に対するコミュニケーションの意図	2.56（1.61）	1.48（0.74）	2.51*
送り手の感情理解	3.84（1.65）	3.00（1.07）	1.81†
送り手の感情に対する正しさの知覚	3.41（1.48）	2.67（1.11）	1.72†
送り手の感情共有	3.41（1.64）	2.20（0.87）	2.67*

注）括弧内は標準偏差
$^{*}p<.05$, $^{\dagger}p<.10$

SD=1.67）の t 検定を行ったが，差は見られなかった（$t(53)<1$, ns）。

考　察

送り手の感情推測の結果より，同じエピソードに対する感情であっても，送り手が表出した感情は，そうでない感情よりも大きく推測されることが示された。さらに，“おもしろさ”感情の推測は，送り手の集団成員性によって異なることも示された。送り手が内集団成員の方が，外集団成員である場合よりも，受け手は“おもしろさ”感情をより大きく推測する傾向が認められた。

なお，送り手が表出していない感情においても，感情条件による差が認められ，“称賛”感情や“良い気分”感情の推測は，“憧れる”と表出された場合の方が“おもしろい”と表出された場合よりも大きかった。対照的に，“気の毒”感情や“悪い気分”感情の推測は，“憧れる”と表出された場合の方が“おもしろい”と表出された場合よりも小さかった。これらのことから，受け手は送り手が表出した感情だけでなく，関連する感情も送り手の感情として推測することが示唆された。

受け手である参加者の感情において，“あこがれ”感情では条件間の差は見られなかったが，“おもしろさ”感情では，集団成員性による影響が認められた。送り手が内集団成員である場合には，送り手によって表出された感情を，表出されなかった感情よりも参加者は強く感じていたが，送り手が外集団成員である場合には，送り手によって表出された感情と表出されなかった感情を感じる強さには差がなかった。この結果は，感情共有に関する本研究の予測を支持するものであった。

送り手が内集団成員であるときには，送り手が

表出した感情によって送り手との結びつきの知覚には相違がなかった。対照的に，送り手が外集団成員であるときには，“おもしろい”と表出された場合の方が“憧れる”と表出された場合よりも，受け手である参加者は送り手に対する結びつきを低く知覚していた。

また，送り手が内集団成員であるときには，送り手が表出した感情によって送り手の感情の正しさの知覚には相違がなかった。対照的に，送り手が外集団成員であるときには，“憧れる”と表出された場合の方が“おもしろい”と表出された場合よりも，受け手である参加者は送り手の感情を正しいと知覚していた。これらのことから，送り手が外集団成員である場合，送り手によって表出された感情に基づいて相手との結びつきや感情の正しさを知覚することが示唆された。

送り手によって表出された感情の内容に関わらず，送り手の感情推測と，受け手の感情との間には有意な正の相関が認められた。しかし，群ごとに両者の関連を検討すると，送り手が内集団成員である場合に表出された感情と受け手の感情との間には相関が見られなかった。本研究では，送り手が内集団成員である場合の方が，受け手はその感情を共有すると予測していた。そのため，内集団成員の送り手の感情推測と，受け手の感情の関連は，特に送り手によって表出された感情に対してたずねた場合に高いと考えていたが，それとは一貫しない結果が示された。この結果は本研究で用いたエピソードや感情の影響による可能性もあり，今後の検討が必要である。

本研究では，送り手が内集団成員である場合の方が外集団成員である場合よりも， 受け手は送り手の態度と同様の態度をターゲット人物に対して持ち，同じ行動傾向を示すと予測していた。態度や行動傾向についてたずねた従属変数において，こうした集団成員性の効果は認められなかった。ただし変数間の関連を検討したところ，ターゲット人物に対する受け手の態度と，ターゲット人物に対する送り手の態度推測の間，またターゲット人物に対する受け手の態度と，送り手に対する態度との間にも正の相関が認められた。このことは，受け手が，ターゲット人物に対する送り手の態度推測や送り手に対する自身の態度に基づいて，未知のターゲット人物に対する態度を形成する可能性を示唆している。

送り手の感情に対する推測と，受け手自身の感情との一致度が，送り手に対する態度に及ぼす影響について検討したところ，一致度が高い場合には低い場合よりも，送り手に対する態度が肯定的であった。このことは，送り手が表出した感情を共有するほど，受け手は送り手に対して肯定的な態度を持つことを示している。ただし，送り手に対して肯定的な態度を持つほど，送り手の感情の推測に近く受け手が自分の感情を報告した可能性もあるため，この点に関してはさらなる検討が必要である。

本研究により，送り手が内集団成員の方が外集団成員である場合よりも，受け手はその感情をより共有することが示された。しかしながらこの効果は，研究で用いた 2 つの感情の一方でのみ認められたものであり，今後は研究で用いるエピソードや感情内容を変えて同様の効果が認められるのか実証的に検討する必要がある。

今後の課題としては以下の点も挙げられる。上記の点とも関連するが，感情の内容の問題である。送り手が“憧れる”と表出した場合の方が，“おもしろい”と表出した場合よりも，受け手は送り手の信頼性を高く知覚していた。またターゲット人物に対する送り手の態度を肯定的にとらえていた。送り手の感情推測においても，“憧れる”と表出されると，“おもしろい”と表出される場合よりも“称賛”感情や“良い気分”感情が大きく推測され，“気の毒”感情や“悪い気分”感情が小さく推測された。これらのことは，“憧れる”と“おもしろい”という感情の肯定さの程度が異なっていた可能性を示唆する。予測していた効果が，“おもしろい”と表出された場合にのみ認められたのはそのためかもしれない，異なる感情を用いて検討することで，この点を明らかにすることができるだろう。

また，集団成員性の操作の問題も挙げられる。本研究では内集団条件として，受け手の友人であ

る送り手が受け手に話しかける状況をシナリオで示した。しかし外集団条件としては，送り手が受け手に直接的に話しかけるのではなく，送り手が他者に対して話しているのを受け手が聞くという状況をシナリオで示した。こうした状況の相違が結果に影響を与えた可能性もあり，この点を統制して再度検討する必要がある。

研究の展望として，送り手の感情の共有がターゲット人物に対する受け手の態度や行動に結びつくプロセスの検討が挙げられる。社会心理学研究により，他者に対する態度が共有された認知に基づいて形成されることが明らかにされてきた。他者に対する態度は，こうした認知の共有に加えて感情の共有によっても生じうるのかもしれない。本研究は，受け手が送り手の感情を共有する状況に関して検討した。今後は，そうした感情共有がどのような影響を他者との関係において果たすのか検討する必要性があるだろう。

注

1）　本研究の一部は，JSPS 科研費 JP18K03017（研究代表者：田中知恵）の助成を受けて実施された。本研究の一部は日本社会心理学会第 59 回大会にて発表された。

2）　Peters & Kashima（2007）の Study 2 では，本文中に示した“怒り”感情に適合するエピソードのほか，“嫌悪”“称賛”“恐怖”の各感情にも適合するエピソードが呈示された。研究では，従属変数に対する感情による相違についても検討しており，たとえば送り手に対する態度は，“称賛”エピソードが話された場合に最も肯定的であることなどを見出している。本論文では結果の詳細については省略する。

3）　質問紙には，たとえば“称賛”と“おもしろさ”の両方の感情に適合する内容など，他に 3 つのエピソードが含まれていた。これらは，予備的調査のために加えられたものであった。

4）　なお，集団成員性によって送り手の感情推測得点と受け手の得点との差に違いがあるか検討したが，“憧れる”条件，“おもしろい”条件のいずれにおいてもそのような違いは見られなかった（$ts<1.41$, *ns*）。

引用文献

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin,* **117**, 497–529.

Bizumic, B., Reynolds, K. J., Turner, J. C., Bromhead, D., & Subasic, E. (2009). The role of the group in individual functioning: School identification and the psychological well-being of staff and students. *Applied Psychology: An International Review,* **58**, 171–192.

Christophe, V., & Rimé, B. (1997). Exposure to the social sharing of emotion: Emotional impact, listener responses and secondary social sharing. *European Journal of Social Psychology,* **27**, 37–54.

Forgas, J. P. (2006). *Affect in Social Thinking and Behavior.* New York: Psychology Press.

Gross, J. J. (2013). *Handbook of Emotion Regulation (2nd ed).* New York, NY: The Guilford Press.

Peters, K., & Kashima, Y. (2007). From social talk to social action: Shaping the social triad with emotion sharing. *Journal of Personality and Social Psychology,* **93**, 780–797.

Rimé, B. (2007). The social sharing of emotion as an interface between individual and collective processes in the construction of emotional climates. *Journal of Social Issues,* **63**, 307–322.

Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review,* **9**, 32–47.

Effects of group membership of senders on affect sharing of receivers

Tomoe TANAKA
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

This study examined the condition when the receivers of communication share the sender's affect. Participants were instructed to imagine the situation that the sender informed them about the episode of a target person. The sender's group membership (ingroup or outgroup) and their affective expression to identical episode (longing or funny) were manipulated. The inference of sender's affect, participant's own affect as a receiver, their attitude toward the sender, the inference of sender's attitude toward the target person, their attitude toward the target person were assessed. Results suggested that the participants share senders' funny affect in the situation that the senders were ingroup members more than in the situation that they were outgroup members. The inference of sender's attitude toward the target person and participant's attitude toward the target person were related. Participant's attitudes toward the target person was also related to their attitude toward the sender. The roles of affect sharing in communication processes are discussed.

Key words : affect sharing, group membership, attitude